



被災の蔵から「氷見針」資料 貴重製品や材料、道具 製造者の子孫、市博物館に寄贈



上：大量に見つかった氷見針の関連資料
中：製造途中の縫い針＝氷見市内で(同市博物館提供)
下：レコード針とみられる製品＝氷見市内で(同市博物館提供)

江戸時代から戦後にかけて全国指折りの縫い針の生産地だった氷見市で、その隆盛を物語る製品や原材料、製作道具などの資料が大量に見つかった。同市博物館に「氷見針」の関連資料はなく、「氷見の近代産業を知る貴重な資料」として寄贈を受けることになった。

氷見針資料は、1日の能登半島地震で損壊した民家の土蔵にあった。1936(昭和11)年に工場生産を開始した製造者が所有。その子孫が、土蔵を壊さざるを得ないとして博物館に相談した。

土壁内の2間(3・6メートル)の壁に作った棚に戦後の製品や粗く精製した針状の金属、未使用の紙袋を保管。製造に使った万力や研磨材、焼き入れに使ったトーチランプもあった。製造技術を生かしたレコード針も見つかった。

博物館の広瀬直樹学芸員は「いろんな工程が残っ

ており、面白い資料。近代史の調査研究に役立てられる」と話している。

博物館は、能登半島地震で被災した家や蔵にある古文書、民具などを安全な場所に移す「文化財レスキュー」を行っている。寄贈または寄託を受け、必要な応急処置を施す。これまでに計9件の相談があり、戦後の農地改革の地主名簿や軍服、刺し網などが寄せられた。

【氷見針】氷見市史などによると、江戸時代初期に長崎から伝来した針穴が丸い製法を採用。幕末には京都などに次ぐ4番目の生産地だった。大正時代には第1次世界大戦の好景気と恐慌を経験。昭和に入り、越中・氷見は広島、浜坂(現在の兵庫県新温泉町)と並ぶ三大産地となり、戦中には国内向け縫い針生産の半分を占め、全国トップとなった。以後は生活様式の変化などで衰退し、1970年代に生産を中止した。(小畑一成)

5分で避難、全員無事

「奇跡じゃなく訓練」津波襲来の高齢地区・珠州市

過去の訓練では、毎回時間を計測。避難先の候補には神社なども拳がったが、混乱を防ぐために一つに絞っていた。奥浜敏孝さん(68)は、強い揺れに見舞われ「パニックになって、冷静に考えられなかった」が、自然と集会所へ足が向いた。「普段からの訓練で、『大丈夫だろう』とは思わずに、家にいる方が怖いと思えた」という。

地区を襲う津波を目撃したという女性(53)によると、「すごい速さで来ていた。逃げていなかったらと考えたらゾッとした」。この女性は「普段訓練をしていなかったら、みんな死んでいたかもしれない。奇跡じゃなくて、訓練が生きた」と真剣な表情で語った。

能登半島先端部に位置する石川県珠州市三崎町は、地震と津波で壊滅的な被害を受けた。

約40世帯90人ほどが暮らす町北部の寺家下地区も地震から間もなく津波に襲われ、多くの住宅が倒壊。それでも大半を高齢者が占める住民は5分以内に高台に避難して全員無事だった。地区では東日本大震災をきっかけに毎年避難訓練を行っており、住民は「奇跡じゃなくて、訓練が生きた」と振り返る。

約2000年前の創建と伝わる須須神社がある同地区には、1日午後4時10分の地震発生から間もなく津波が襲来。海沿いを通る道や海岸の至る所に、家具やタイヤ、住宅の一部だったと思われる木材が散乱していた。

「この地震なら津波が来る」。東日本大震災以降、大地震と津波を想定した避難訓練を年1、2回続けてきた住民は、揺れが収まると荷物を持たずに、体一つで坂道などを上り、高台の集会所に向かった。近所同士で声を掛け合い、足の悪い人を背負うなど協力。地震から5分ほどで全員が集会所に到着すると、津波が到達したという。

we support!

RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒糖を送ろう！大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけさきた』しんぶん
かめらぼと

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

FEBRUARY
11
2024

